

クリエイティブ ディレクター 佐藤 卓 氏

セラミックバレーのシンボルマークと「世界は美濃に憧れる。」のコピーは、日本文化に詳しいライターの橋本麻里さんや無印良品のネーミングを開発したコピーライターの日暮真三さんに声かけし、ディスカッションしてセラミックバレーという名前が生まれました。

世界から見たらこの産地は小さな場所の一角所、多様性を個性と捉え、セラミックバレーと呼ばれる場所にすることで、世界に類を見ない特別な場所になります。



佐藤卓さん略歴

「ロッテ キシリトールガム」「明治おいしい牛乳」のパッケージや、「金沢 21 世紀美術館」「全国高等学校野球選手権大会」シンボルマークのデザイン、NHK E テレ「にほんごであそぼ」アートディレクター、「デザインあ」総合指導など多岐にわたって活動。

籠橋 10年ほど前から土岐市の支援を受けて「TOTTOKI」という活動をしています。美濃焼の原料、釉薬、土、メーカー、商社などを巻き込んで「縦と横のつながりを作りたい」「今までの組織でない組織を作りたい」という思いで活動をしてきました。お互いを知る、自分のことも知ってもらうために、「生工場」という工場見学会をやりました。今まで表に出る機会がなく人に見てもらえる場所がなかった「型」屋さんなどが、どんどん面白いことを考えて新しいことをやって、非常にいい効果が出たと感じています。

林 このエリアではイベントなどを集約しているところはあまりなく、現状それぞれでやっていますね。

籠橋 いろいろな業種の方とお付き合いさせてもらっているつもりですが、意外と知らないことが多いと感じます。コロナ禍においては SNS（インターネット上で利用者同士が交流するサービス。ラインやフェイスブック、インスタグラムなどのこと）を使って、「土」屋さんや「型」さんを回って体験したことを動画で見てもらえるように行動しました。また、土岐だけでもたくさんの祭りがあるので、集約し大きなイベントとすることで集客が上がり、みんなのモチベーションも上がると思います。それぞれの想いも大切にしながら、変化を恐れず、新しい考え方で連携して取り組むことで、素晴らしいものになると思います。

金津 本業は磁器食器のメーカーですが、瑞浪のやきものを世界に発信するための活動もしています。世界に美濃焼を発信していきたいと考えています。3市の原料メーカーで「GL21」という磁器のリサイクル食器のグループで力を入れて活動しています。

林 みなさんそれぞれの活動はまさしくセラミックバレー構想の大きい赤い円の一部ですね。

井澤 海外からのアーティストは「ストーリーは何か」と必ず聞きます。誰が作ったかではなく、その先にある歴史や文化、原点です。例えば、可児市の久々利で工房を持つことは荒川豊蔵氏の出発点であり魅力的なことです。

林 円卓会議でそういった話が聞けることで、未来につなげていけるのではないかと思います。作家で食べている人は世界的に少ないと思いますが、この地にはそんな作家さんがたくさんいます。

籠橋 インフラとして土や釉薬、道具などすべてのものが揃っているのが作家としては活動しやすい場所だと思います。

林 技術的にも集約されていますね。

井澤 同志を増やしていくことが大切です。みんなが広めるという意識を持つ、その意味でセラミックバレーのシンボルマークやコピーが必要で、スピードと効果が期待できます。

佐藤 自然発生的に始まると面白くて意味のある現象になります。各市に若くてやる気のある人がいると思います。その人たちとどのようにつながるか、問題意識を持つというのは、自分の作品を作るだけでなく、産地の文化をどうやって未来に残していくか、そういった社会問題意識をもちながら活動していくことです。それがネットワークやエネルギーになり、同志を増やすことになります。歴史を作ってきた人に敬意を表しつつ、問題意識を感じて新しいやり方でやっている人が多くいます。そんな人たちが産地のために全体とし

オブザーバー



多治見市長 古川雅典



瑞浪市長 水野光二



土岐市長 加藤淳司



可児市長 富田成輝